ツキジデスにおける分詞構文の用法

柳沼重剛

この春（1982）来日されたドーヴァ先生は、筑波大学での講演[1]の中でツキジデスの筆法に言及しつつ、彼はある人物がある行為をしたという事実を記録するに止まらず、その行為に及ぶに至った動機まで述べている、と指摘された。その後、学士会館での討論集会の席である若い文学の研究者からこの点について質問されたり、あるいは筆者自身も個人的に先生と話す機会があったりして、この問題についての先生の見解をさらに詳しく伺うことができたのだが、要点は、ツキジデスの『歴史』の中には行為の動機を表す分詞構文が意外なほど多い、と言えば尽くせる。そして（ゴムの後を承けて）ツキジデスの註釈を完成し、第6巻、第7巻は少なくとも百回以上読んだという先生[2]にとってさえ、これは驚くべき発見だったとのことである。先生のその驚きの背後には、歴史を叙述する者が動機にまで筆を及ぼしたいと思う場合、それがある行為の動機だということを確信できる、従って、読者にもそれが動機だということが納得できる場合にのみそれを書き、そうでない場合は徒らに動機を推定して書くべきではない、という認識があり[3]、それにしてはツキジデスが動機に言及している頻度が高いという印象が強い、ということなのである。本稿はそのドーヴァ先生の印象を確認するための作業である。第一に、ツキジデスにおける「動機を表す分詞構文」の用例の実態調査、とくに「意外なほど」あるいは「驚くほど」多いとのことだが、実際にどれだけ用いられているのかという数の調査をすること、第二に、この「動機を表す分詞構文」はツキジデス独特の筆法なのか、それともギリシアの歴史家に共通した筆法なのかを確かめるために、ツキジデス以外の歴史叙述の文章にもできるだけ目を通すこと、この二点を差当っての目標とし、それから先は、そこで出て来た結果を見てから考えることにするが、一つの予想として、分詞構文をつついているうちにもっと視野をひろげなければならない事情が恐らく出て来て、本稿は畢竟中間報告という形に終らざるを得まいということである。

1

動機を表す分詞構文と言っても、実際に文章を読んで個々の例に当ってみると、これは間違いなく動機を表している、と指摘するのはかなりむずかしい。一般には「…と思って」「…しようと思って」「…だろうと期待して」「…だと信じて」「…ではないかと恐れて」などという意味を表す分詞構文がそれだということになろうが、こういう言い廻しがあればすべて「動機を表し」ていると とってよいかどうかは問題になる。例えばどの歴史家の文にもよく出て来る分詞構文の中に「それを聞いて」というのがあって、その中のいくつかはもちろん動機を表しているだろうが、非常に多くの場合は表していない。会議の場面で一人の話者の言葉と次の話者の言葉の間に、ほとんど常套文句のように「それを聞いて誰某は次のように言った」という文句が現れるが、これはまず「動機を表す分詞構文」の範疇には入らない、と比較的容易に断ずることができる（まず常套文句的であることから[3a]、次にこの文句のニュアンスはほとんどの場合「それを受けて」「すると」「そして次に」等々と同じであることから）が、「…ではないかと恐れて」というのもしばしばあって、「…ではないかと恐れて先制攻撃をかけた」というのと「…ではないかと恐れて振向いた」というのとではどうだろう、と考え出す辺りから怪しくなって来る。先制攻撃をかけた方なら「動機を表す」ととっても構わないが、ただ振向いたというのはどうだろう。しかし「ただ」振向いた、というのはこちらそう感じているだけで、振向いた当人は「ただ」振向いたのではないかも知れない。確かに「恐れた」ことは「振向いた」ことの動機をなしているかも知れない。しかしそう言ってしまうことに一種の落着きの悪さをやはり感じるのは、先制攻撃の方は歴史的行為であるのに対して、振向いた方は全く個人的なその場限りの行為にすぎないためではないから、などと考え始めるとこれはもう泥沼である。歴史的行為とそうでない行為を区別する客観的規準というものはないからである。それでも、先制攻撃と振向いたという行為の価値の区別ぐらいつけられなくてどうするのだ、と言われれば、その通り認めてもよいが、この両者の言わば中間に無数の行為があって、それらは歴史的行為と見えたりそうではないと見えたりする。黒白をつける、と言う。黒と白の区別は誰にもできるが、黒を次第に薄めて白に近づけ、白を次第に黒ずませて黒に近づける場合、どこまでが黒の領分でどこからは白と呼ぶべきなのか。仮に中間にねずみ色という色を認めるならば、

今度はそのねずみ色と黒、あるいは白との境界はどこにあるのか。客観的規準はないだろう[4]。しかもツキジデスの場合にはその「ねずみ色」さえない。動機を表しているかいないかのどちらかである。従って、ある分詞構文が動機を表しているかどうかの判定は、どうしても主観的にならざるを得ない。それればかりか、同じ一人の私という人間が読んでいても、第1巻を読んでいた時は棄てた分詞構文を、第2巻を読みながら似た文章に出逢った時にはやはり棄ててはいけないように思えて、そこでもう一度第1巻の問題の箇所を読み直して手直しをする必要も出て来る。どうかすると、その次にもう一度読んでみてやっぱり棄てた、ということもある。今回筆者が調査の対象にしたのはツキジデスの全巻とヘロドトスの第7巻、クセノポン『ヘレニカ』第1-3巻、ポリュビオスの第1巻、プルタルコス「英雄伝」から『テミストクレス』と『アントニウス』だが、これだけの分量の対象に対して、つねに同じ判断の基準を保つことは非常に困難で、先刻述べた「手直し」を何度もやらなければならなかった、従って以下の調査結果は、他人の目で見れば多少違って来るであろうことはもちろん、筆者自身でさえ、この次読めばまた手直しをしなければならないかも知れぬ性質のものであって、それなら論文など書かなければよいと言われそうだが、一つにはさっきも言ったように絶対的な規準というものが有り得ないからこれ以外に方法がない、と断定せざるを得ないのと、もう一つには、そうは言ってもある程度のことは言えそうだと思えるので披露することにする。ある程度というのがどの程度のことなのかは、結果を見て判定して頂く他ない。

次に調査対象であるが、まずツキジデスに関しては、すべての演説の箇所を除いた叙述部分とする。ただし、有名な、第4,5,8巻の、資料からの逐語的引用は省く。また、ツキジデスにはその例はそれほど多くはないが、間接話法によって誰かの言葉が引用してある箇所（例えばVII 48.3-6）も対象としない。いずれも純粋なツキジデスの叙述ではないからである。次にヘロドトスの、ことさらに第7巻を選んだ理由は、内容が多少共ツキジデスに近いからで、それならなぜ第8巻第9巻まで含めなかったかというのは、そこまで見る時間がなかったと言うに尽きる。なおヘロドトスには直接話法・間接話法による引用が非常に多いが、それらはすべて対象外とする。クセノポンは『アナバシス』の方が代表作かも知れないが、『ヘレニカ』の方がツキジデスに内容が近いのと、それ以上に、『アナバシス』はつねに自分、および自分の周辺のことを記している点で他の著作とは事情が違う、すなわち「動機」を記し易い条件に恵まれているという事情がある、から避けた。それを第3巻までに限ったのも時間の制

約による。ポリュビオスについては、やはり時間の制約のため第1巻しか見られなかったこと以外には、何も言うことはない。プルタルコスを「歴史家」の仲間に入れることには問題があるが、参考にすることに対して決定的に否定的な理由はないと考えたので取上げた。ただしこれも時間の制約ゆえに、ギリシア人から『テミストクレス』、ローマ人から『アントニウス』の2篇のみを選んだ。ついでながら『テミストクレス』は逸話の要素が比較的多い伝記であり、『アントニウス』はそれに比べれば歴史の要素が多く混入している伝記である。プルタルコスには各種の引用がかなり多いが、これらは無論全部省く。対象としたすべての作家について、もし比喩があればそれも省いて、要するに純粋に事実を記述している部分にのみ注目する。なお使用テキストとしては、次節以下に紹介するような種々の計算をする必要のために、OCT にあるものはすべて OCT を使い、OCT にないポリュビオスとプルタルコスは止むを得ず Loeb 版と Teubner 版をそれぞれ使った。

2

分詞構文というのは、文法家が circumstantial participles と名づけている分詞によって形作られ、その分詞が副詞節と同じ機能を果すもののことである。文法家の分類では、いわゆる genitive absolute も circumstantial participles の中に通例入ることになっているが、ここではそれを省くことにする。それは、genitive absolute というのは普通の、近代のヨーロッパ諸国語を通じて誰にもおなじみになっている分詞構文とはちょっと違ったところがあるからであり、違った所があるだけに、その表す意味もほとんどの場合時間の前後関係であり、その他に譲歩や付随的状況を示すことはあっても、動機を表すことは極めて稀だからである（ツキジデスにその例はない。他の作家については表3の註 ** を参照)。

まず表1は、そういう分詞構文（表ではそれを「C分詞」としてある）がどれぐらい使用されているのかを概観するものである。第一に、どんな用法であれとにかく使用されている分詞の総数を「分詞数」の欄に示し、それが何行に1個の割で使われているかを示すのが「同頻度数」である。「何行に1個」でなく「1頁に何個」という表示法もあろうが、先にも断ったように、テキストの中から対象外として割愛する箇所がかなりの数に上るために、頁数の計算は甚だ厄介なことになるし、それに「何行に1個」の方が概念的につかみ易いだろ

表　1

		行数 (OCT)	分詞数	同頻度数	C分詞数	同百分比
Hdt*	Ⅰ	2,456	1,325	1.9	799	60.0
Th*	Ⅰ	1,761	960	1.8	589	61.4
	Ⅱ	1,830	817	2.2	481	58.9
	Ⅲ	1,404	750	1.9	453	60.4
	Ⅳ	2,229	1,341	1.7	767	57.2
	Ⅴ	1,495	824	1.8	459	55.7
	Ⅵ	1,332	674	2.0	430	63.8
	Ⅶ	1,698	882	1.9	529	60.0
	Ⅷ	2,195	1,187	1.9	702	59.1
	計	13,944	7,435	1.9	4,408	59.3
X*	Ⅰ	761	461	1.7	277	60.1
	Ⅱ	661	321	2.1	222	69.2
	Ⅲ	848	542	1.6	330	60.9
	計	2,270	1,324	1.7	829	62.6
Po*	Ⅰ	** 2,843	2,111	1.3	1,072	50.8
Pl*	*Them*	*** 880	685	1.3	393	57.4
	Ant	*** 2,087	1,732	1.2	999	57.7
	計	*** 2,967	2,417	1.2	1,392	57.6

* 以下の表では作家名をこの略号で表す。Hdt＝ヘロドトス，Th＝ツキジデス，X＝クセノポン，Po＝ポリュビオス，Pl＝プルタルコス。なお *Them*＝『テミストクレス伝』，*Ant*＝『アントニウス伝』

** Loeb 版を使用したので，この版の1行の平均語数と OCT のツキジデスの1行の平均語数を対比し，Loeb 版の実際の行数（3,717）から割出したもの

*** Teubner 版を使用したので，上と同様の手続によって割出したもの。Teubner 版による実際の行数は *Them*＝1,046，*Ant*＝2,480。

うと思えるので、こういう計算法にした。当然ながら数値が低いほど頻度は高いことになる。最後の「同百分比」というのは、使用されているすべての分詞の中で、分詞構文を形成しているC分詞が占めている割合である。

この表から伺えることは次の2点である。第一は、文中に分詞を用いる頻度は時代が下るにつれて高まったということ、第二は、それにもかかわらず分詞構文（C分詞）が分詞全体の中で占める比率は（ポリュビオスを顕著な例外と

して）さしたる変化はないということである。注意しなければいけないのは、「さしたる変化がない」のは分詞全体に対する比率で、然るにその分詞全体の使用数は次第に増えたのだから、当然分詞構文の使用は後代の作家ほど頻繁になったことになる、ということで、このことは、これらの著作を調査の対象としてでなく読物として読んだ時の印象と大きく違っていないことに安心する。念のために、これを「何行に1回分詞構文（C分詞）が使われているか」という表示法で示すとこうなる。Hdt=3.1, Th=3.2, X=2,7, Po=2.6, Pl=2.1。ポリュビオスが例外だと見えることについて一言しておくと、ほとんど3,000行に近い文章を調べたのだから、彼の文章についておよそのことは分るはずだと期待される一方、表中のクセノポン『ヘレニカ』が、第2巻でだけ突出した違いを示しているのが一つの警告で、あれだけ大きな著作の中から1巻だけ見てポリュビオスを例外だと決めつけるのは早計の謗は免れない(5)。ただこの表に関する限りは例外だと言えるに止まる。

3

次に表2に移る。まずCpr, Cpoという記号で示されたものについて言っておかなければならない。Cprとは「定動詞より前に置かれたC分詞」あるいは（分詞は形式上は無論名詞または代名詞にかかるが、意味の上で）「自分が修飾(depend)している動詞よりも前に置かれたC分詞」のことであり、Cpoとはそれとは反対に「定動詞または自分が修飾している動詞より後に置かれたC分詞」のことである。C分詞とは分詞構文を作る分詞だから分詞構文と主節の前後関係、さらに分詞構文とは副詞節の機能を持っているのだから、そして副詞節とは要するに従属節の一種なのだから従属節と主節の前後関係は、文法事項の中には入らないのか、Kühner-Gerth もSchwyzer も言及してはいない。ギリシア語ばかりでなく、最近の英語文法書として高名なQuirk-Green-Leech-Svartvik, *A Grammar of Contemporary English* (London 1972) も，行きずりにちょっと触れているだけである (743f.)(6)。「…しようと思って」という分詞が「…した」という定動詞より前にあろうが後にあろうが「…しようと思って」という意味が変るわけではない（これはその通り）し、訳してしまえばどちらも「…しようと思って…した」となる場合が多かろうけれども、これは訳すからそうなるのであって、書いた人はこの語順通りに考えをまとめたのである。分詞が前に来ている時はその順序で考えを進めたのであり、分詞が後に

表　2

		Cpr		Cpo		CprM		CpoM	
		実数	対C百分比	実数	対C百分比	実数	対Cpr百分比	実数	対Cpo百分比
Hdt	I	482	60.3	317	39.7	60	12.4	32	10.1
Th	I	383	65.0	206	35.0	23	6.0	31	15.3
	II	339	70.5	142	29.5	21	6.2	22	15.5
	III	316	69.8	137	30.2	41	13.0	33	24.1
	IV	525	68.4	242	31.6	39	11.2	65	26.9
	V	289	62.8	170	37.1	39	13.5	61	35.9
	VI	297	69.1	133	30.9	33	11.1	27	20.3
	VII	346	65.4	184	34.6	37	10.7	33	18.0
	VIII	512	72.9	190	27.1	39	7.6	53	27.9
	計	3,006	68.2	1,404	31.8	291	9.7	324	23.1
X	I	178	64.3	99	35.7	8	4.5	12	11.8
	II	151	68.0	71	32.0	10	6.6	11	15.5
	III	241	73.0	89	27.0	27	11.2	15	16.9
	計	570	68.8	259	31.2	45	7.9	38	14.7
Po	I	800	74.6	272	25.4	69	8.6	29	10.7
Pl	*Them*	270	68.7	123	31.6	30	11.1	8	6.5
	Ant	672	67.3	327	32.7	41	6.1	29	8.9
	計	942	67.7	450	32.3	71	7.5	37	8.2

なっている時もその順序で考えたのである。どちらも同じだということには決してならない。分詞を定動詞の前に置けば (Cpr)、分詞の表す意味は定動詞にそのままつながり、収斂され吸収されて行くのに対して、分詞を定動詞より後に置く時は (Cpo)、定動詞に後から付加される補足的説明になる、ぐらいの違いはあるだろう。言い換えれば、同じ分詞構文でも、Cpr よりは Cpo として使われている時の方が、分詞の意味内容が定動詞に対してやや強く独立を保っている、と言えそうだということである。

そこで表2でその Cpr と Cpo の比率を見ると、ここで扱っている5人の作家に共通の傾向として Cpo よりは Cpr の方を多用している、つまり分詞構文を定動詞より先に出していることが分る。最低のヘロドトスでも約 60%、最高のポリュビオスでは 75% も、分詞構文が定動詞に先立っている。ところが、

Cpr, Cpo それぞれの中で、動機を表す分詞構文を形成している分詞（これを表2では CprM, CpoM という記号で示してある）がどれぐらい含まれているかという比率には、かなり目立つ数字がそこに示されている。つまり、Cpr が CprM になっている（すなわち動機を表している）比率はほとんど一桁であるのに対して、Cpo が CpoM になっている比率は一目瞭然高いということである（唯一の例外はヘロドトスで、彼の場合は CpoM の比率より CprM の比率の方が僅かながら高い——ただし例によって、このヘロドトスも、もし全巻を調べたならばやはり例外ではなくなる可能性が十分ある）。しかしながらここ

表 3

		CprM	CpoM	左の合計	CpoMの比率	行 数	CprM+CpoMの頻度数
Hdt	I	60	32	92	34.8	2,456	** 26.7
Th	I	23	31	54	57.4	1,761	32.6
	II	21	22	43	51.2	1,830	42.6
	III	41	33	74	44.6	1,404	19.0
	IV	59	65	124	52.4	2,229	18.0
	V	39	61	100	61.0	1,495	15.0
	VI	33	27	60	45.0	1,332	22.2
	VII	37	33	70	47.1	1,698	24.3
	VIII	39	53	92	57.6	2,196	23.9
	計	291	324	615	52.7	13,944	22.7
X	I	8	12	20	60.0	761	38.1
	II	10	11	21	52.4	661	31.5
	III	27	15	42	35.7	848	20.2
	計	45	38	83	45.8	2,270	** 27.3
Po	I	69	29	98	29.6	* 2,843	** 29.0
Pl	*Them*	30	8	38	21.1	* 880	23.2
	Ant	41	29	70	44.6	* 2,087	28.2
	計	71	37	108	34.3	* 2,967	** 27.5

* この行数については表1の註を参照

** これらの作家では Genitive Absolute によって動機を表している例が僅かずつある。それを計算に入れるとこの頻度数は次のようになる

Hdt： +3→25.9　　X ： +4→26.1

Po ： +6→27.3　　Pl ： +1→27.1

でも注意しなければならないことは、Cpo に対する CpoM の比率の方が、Cpr に対する CprM の比率より高いということは、そのまま CpoM の方が CprM より用例が多い、つまり動機を表す分詞構文は定動詞よりも後に来ることが多い、ということにはならないということで、それを確かめるにはこの表のそれぞれの「実数」を見ればよい。しかしその間の事情をもっと端的に示しているのは次の表3の方である（表3に移る前に、表2ではまだ他に、例えばツキジデス第 1-2 巻の CprM と CpoM の比率が異常に低いなどというのが目立っていることについて、ここで何か言った方がよいのかも知れないが、これについては別の連関において（§5）触れることになるはずである）。

その表3の左端の二つの欄は CprM と CpoM の実数で、表2から転写したもの、その右はその二つを足したもの、つまり、定動詞より前にせよ後にせよ、動機を表す分詞構文として使われている分詞の総数である。さらにその右は、その総数を分母として CpoM を割ったもの、言い換えれば、動機を表す分詞構文のうち、定動詞より後に置かれているものの比率である。右から2番目の行数は表1からの転写、そしてそれを CprM＋CpoM で割った値が最後の欄で、言い換えれば、定動詞前も後もおしなべて、およそ動機を表す分詞構文なるものは何行に1個の割で現われているのかを示している。

細かいことを言う前に、とにかくまずこの表の CpoM の比率を見ると立ち所に分るのは、動機を表す分詞構文といえども、定動詞の後よりは前に置かれることの方が多いということである（唯一の、しかも辛うじての例外が全体としてのツキジデス。巻別に見ればこのツキジデスも、第 3, 6, 7 巻ではやはり他の作家と同じく動機を表す分詞構文を定動詞の前へ置いている例の方が多い）。そこで先刻の表2の、Cpr と Cpo それぞれの動機を表す分詞含有率から得た印象についてだが、要するに次のようなことであろう。すなわち、C分詞一般も動機を表す分詞も、共に定動詞の後よりは前に置かれることの方が多いのだが、C分詞一般における pr と po の差の方が、動機を表す分詞における pr と po の差より遥かに大きい。参考までに、表2と表3から計算すればすぐ分ることだが、動機を表す分詞の場合、ここに取上げた5人の作家を通じて、pr と po の対比は 117：100 であるのに対して、それを除いたC分詞一般の pr と po の対比は 235：100 にも及ぶ。つまり、C分詞一般に関して言えば、分詞構文というものは定動詞よりも前に置かれることが決定的に多いが、その中にあって動機を表す分詞構文は、やはり定動詞より前に置かれる方が多いのだが、一般の分詞構文と比べるなら、定動詞より後に置かれる機会がかなり多い、ということ

なのである。そこでもし、先に本節の初めの所で論じたように、Cpr として使われた分詞より Cpo として使われた分詞の方が定動詞に対して独立性が強い、ということが正しいとするならば、動機を表す分詞構文はそうでない分詞構文よりも、定動詞に対して意味の上での独立性が強く、定動詞に対する補足説明風な使われ方をすることが多かった、とくにツキジデスの場合その傾向が強かった、と言うことができる。

4

表3をしまいまで見る。するとこの表はもう一つ、甚だ重要なことを教えていることに気がつく。それは表3の右端の欄で、これは、CprM にせよ CpoM にせよ、とにかく動機を表す分詞構文が何行に1回の割で現れるかを示しているのだが、無論数値の低いほど頻度は高い。すると、この表の示すところによれば、動機を表す分詞構文を最も多用しているのはツキジデスだということになる。彼以外の作家はそれぞれ 26.7, 27.3, 29.0, 27.5 行に1個、全部平均すると 27.6 行に1個の割であるのに対して、ツキジデスは 22.7 行に1個の割で使っている。27.6 と 22.7 という数字だけ比べれば大した相異にも見えないが、27 行に1回何かが現れる文章と、22 行に1回それが現れる文章とでは、読んだ時の印象はかなり違うはずである。つまり、他の作家に比べるとツキジデスは、かなり多くの「動機を表す分詞構文」を使っているという印象を得るはずである。ところが実際には、そう印象を得ながらツキジデスを読んだ経験は筆者には一度もないのみならず、この調査を始める前の予想としては、ツキジデスよりは他の歴史家の方がそういう分詞構文を余計に使っているであろうと考えていた。

こういう印象を受けた覚えがない、という方は、こういう事実が初めからそこにあるのに、こちらがそれに気づかなかった、ドーヴァ先生に言われて初めて気がついた、ということであると同時に、§2 の終りに近くで指摘したように、後代になるほど分詞構文の使用が頻繁で、例えばポリュビオスの文章などはこれを濫用していると言ってもよく、ほとんど一定のパターンでのべつに出て来るので、文章全体が機械のような感じがして来る、ということにも起因していると思える。ポリュビオスは 1.3 行に1個の割で分詞を使い，そのうち 50.8% が分詞構文なので、分詞構文は2行半に1度現われる計算だが、ポリュビオスという人は分詞を使う時はむやみと使い、その代り箇所によってはほと

んど使わない、というような文の書き方をした人だから（註(5)を参照）、使っている箇所ではほとんど毎行分詞構文に出逢うこともある。そこへ行くとツキジデスの分詞使用数は約2行に1個の割で、そのうち約6割が分詞構文だから、分詞構文は平均して3行ないし3行半に1個だということになる。こうして、「動機を表す」分詞構文に特に注意をしないでツキジデスとポリュビオスを読んだ経験だけが実績となれば、ポリュビオスという人は実によく分詞構文を使う人だという印象だけが非常にはっきりと残り、そこへ「動機を表す分詞構文」などということを言われれば、その分詞構文もポリュビオスには多い、少なくともツキジデスよりは比べものにならないほど多いだろう。という予測はごく自然に立てられてしまう。言い換えればこれは、物事を少しだけよく知っている、しかし本当にはよく知らなかったことに起因する先入見だったにすぎないのである。

ツキジデスが動機を表す分詞構文を最も多く利用していることについて我々が感じる意外感にはもう一つ理由があって、それも先入見に基いている。というのは、研究書や解説書の記事によっても、自分で読んで得た印象によっても、ツキジデスは「神経質なまでに正確と公正を期し」[(7)] た人だということがよく分り、先輩のヘロドトスに「歴史の父」の栄誉を譲りはしたものの――この呼称の現存する最古の出典であるキケロの『法律について』(I 1.5)[(8)] では、甚だ皮肉なことに、「歴史の父 (pater historiae) ヘロドトスには（史実ではない）お噺し (fabula) がたくさん書いてある」という言い方で言及されている――今日の学問的検証に耐える最初の歴史書を書いたと言われるのももっともだと思われる。それに対して他方、初めに引用したドーヴァ先生の言葉にもそれが表れているように、行為そのものを記すに止まらずその動機まで書くというのは、その動機なるものは推測によってしか書けないことが普通であるゆえに、もし歴史家が正確さを最大の眼目として目指すのであれば、言及しない方がよいものである。学士会館での質問者が「先日先生は筑波大学でツキジデスを批判なさっていらっしゃいましたが…」と言ったのに対して先生は、「批判というのは言葉がきつすぎるようだが…」と答えておられたが、それなら先生は動機を表す分詞構文をツキジデスが思いの他多用していることに違和感を感じておられたのである。ついでながら先生は、同じ筑波大学での講演の中で、ツキジデスが明かに事実を誇張していたり、あるいは知っているはずだのに言及していない事実があったり（共に直ちに事実を歪めることに通じる）することを指摘されている。こういうこと、それから動機までも書いているということ、そうい

うことがあっても相変らずツキジデスが正確公正だという印象が我々に残るとしたら、それは何に由来するのか問わねばならないだろうし、例の幾多の演説が組込まれていること、あるいは個々の演説そのものと同様、これがツキジデスの歴史に何を寄与しているのか、とくに正確さということとどう関わり合っているのかが問われねばならないであろう。

5

この件は今しばらく措くとして、次に語彙に注目したいと思う。動機を表す分詞構文用にツキジデスが用いている分詞のうち、その使用頻度から言って非常に目立つのが *νομίζων* と *βουλόμενος* およびこれらの語の他の形で、*νομίζων* および *νομίζων* の他の形（以下この「および…」という注記は省略する）は112回、*βουλόμενος* は96回用いられている。これがどれぐらい目立つかと言うと、これらに次いでツキジデスが多用しているのが *δείσας* の68回だから、この両者の頻度は抜群と言ってよい。これは考えてみれば当り前のことかも知れない。と言うのは、*νομίζων* は「…と考えて」という意味だし、*βουλόμενος* は「…と欲して」という意味だから、動機を表す分詞としては打ってつけだからである。因みに、表3の「左の合計」欄が示すように、ツキジデスが動機を表す分詞構文として使った分詞の総数615、そのうち *νομίζων* と *βουλόμενος* は208、つまり3分の1強を占めているわけである。参考までにこの二つの動詞について他の作家の状況を見ると、ヘロドトスが9回で全体の6.5%、クセノポンが26回31.3%、ポリュビオスが27回で27.6%、プルタルコスが12回11.1%（ただし *βουλόμενος* のみ。この二つの伝記ではプルタルコスは *νομίζων* を一度も使っていない）となっていて、クセノポンとポリュビオスがややツキジデスに近い他は、ツキジデスほど集中してこの二つの分詞に頼ってはいないことが分る。しかし *βουλόμενος* だけについて見るならば、ヘロドトスは僅か1巻だけで8回使っているので、もし他の巻でも第7巻と同じ頻度で使っているとすれば、全体で72回使っていることになって、これは文句なしに多いと言わねばならない。ポリュビオスにしても第1巻だけで14回というのは多い。また例の如くということになるが、ツキジデス以外についてはその著作の一部しか見ていないための事実誤認の危険がここにもある。そこで動機を表す分詞構文の主要な分詞を全部拾って、意味別に分類し、さらに pr, po の用法別に一覧表にしてみる（表4）。

このI~Vまでの計16個の分詞が「動機を表す分詞構文」全体の中に占めている比率（各作家ごとにここに挙げた分詞の使用数を集計して、それを表3から得られる各作家ごとのCprM＋CpoMで割ったもの）は次の通りになる。すなわち、ヘロドトス＝0.51，ツキジデス＝0.82，クセノポン＝0.62，ポリュビオス＝0.54，プルタルコス＝0.43。この数字が大きいほどこれらの分詞への集中度が高いわけで、こうして見ると先に *νομίζων* と *βουλόμενος* について

表　4

I「‥‥と思って」

	νομίζων		*οἰόμενος*		*ἡγούμενος*		*δοκῶν*	
	Pr	Po	Pr	Po	Pr	Po	Pr	Po
Hdt	0	1	0	0	0	0	2	3
Th	37	75	7	9	6	16	2	4
X	6	8	1	1	3	0	1	0
Po	12	1	1	1	0	0	0	0
Pl	0	0	0	4	3	0	0	1

II「‥‥と知って」

	αἰσθόμενος		*γνοῦς*		*ἰδών*	
	Pr	Po	Pr	Po	Pr	Po
Hdt	0	0	1	0	2	0
Th	18	6	20	0	16	11
X	1	0	3	1	3	1
Po	0	0	1	0	3	1
Pl	2	0	1	1	1	0

III「‥‥を見て」
「‥‥を聞いて」

	ὁρῶν		*θεώρων*		*πυνθανόμενος*		*ἀκούσας*	
	Pr	Po	Pr	Po	Pr	Po	Pr	Po
Hdt	2	0	0	0	11	0	2	0
Th	23	20	0	0	16	5	0	0
X	3	1	0	0	2	0	0	0
Po	5	1	8	0	0	0	1	0
Pl	1	0	0	0	2	0	0	0

Ⅳ 「‥‥を恐れて」
「‥‥と恐れて」

	δείσας		φοβούμενος	
	Pr	Po	Pr	Po
Hat	2	4	0	0
Th	36	32	16	14
X	0	2	2	4
Po	1	1	2	0
Pl	2	4	8	0

Ⅴ 「‥‥したいと思って」

	βουλόμενος		ἐθέλων		ἐλπίζων	
	Pr	Po	Pr	Po	Pr	Po
Hat	2	6	2	4	1	2
Th	26	70	0	1	6	14
X	5	4	0	0	0	0
Po	6	8	0	0	0	0
Pl	8	4	0	0	2	3

だけ見た時の印象とはちょっと違う結果になっている。すなわちツキジデス以外の歴史家たちは、概してここに挙げた動詞以外の動詞の分詞（主として未来分詞）を使って動機を表す傾向があらわになっているように思える。そして先ほどの、時代が下るほど分詞構文を多用（場合によっては濫用）している、というのを思い合せると、総じて時代が下るにつれて分詞構文の使い方が無造作になった、ぐらいのことは言ってもよいと思う。

個々の作家の個々の分詞の使い方を見る時、ツキジデスが νομίζων, ἡγούμενος, βουλόμενος, ἐλπίζων を主として Cpo として用い、それに対して αἰσθόμενος, γνοῦς）これは 100% Cpr)、ἰδών を主として Cpr として用いていることは一目瞭然だが、これが彼の癖によるのか、あるいは何かもっと深い理由があるのかは、ツキジデス以外の作家についての資料が不足しているから言えない。ただヘロドトスの πυνθανόμενος などはかなりはっきりした傾向を示している (Cpr) と見てよく、しかも他の作家のこの分詞の使い方を通観すると、どうやら概ね Cpr として用いられていると見受けられるし、同じ III グループの ὁρῶν もやはり Cpr として用いられる方が多かったと言えそうだし、

II グループの *ἰδών* にしてもそうだと思え、V グループの *ἐλπίζων* は恐らく Cpo として用いられることが多かったろうなどと思えて、動詞ごとに余り厳格でないにせよ分詞構文を作る時に Cpr にするか Cpo にするかについてある種の慣習があったのではないかと想像しようという気になる。しかしそれなら V グループの *βουλόμενος* のようなのはどうなのかと言われると、返事に窮するばかりで知慧が働かない。恐らくこの資料から言える精一杯のことは、どうやら I グループと II グループは Cpo として用いられる傾向があったと見られるのではないかということと、それに対して II グループと III グループはかなりはっきり Cpr となる傾向を示しているということぐらいなものだろう。この点に関してはツキジデス以外の作家についての数字が出揃わない限りは何を言っても危険である。

6

すでに表 1-3 から、ツキジデスの分詞の用法はつねに一定なわけではなく、各巻ごとにかなりの数の上の差があることが分っている。とくにはっきりしているのは表 3 の右端の CprM+CpoM の頻度、すなわち動機を表す分詞構文の各巻毎の頻度で、第 1, 2 巻はそれが極端に少なく、逆に第 3, 4, 5 巻にはそれが多く、第 6, 7, 8 巻は丁度中位、というにかなりはっきり色分けされている。はっきりしているだけにここから何か言えるのではないかと期待しないわけではないが、まさかたったこれだけのことから Composition Problem に何か一石を投じようなどというのは粗忽の誹を免れまい。それにそもそも巻別というものがどれほどツキジデスの意図を反映しているのか甚だ心許ない状況である[9]以上、これは余りかかずらわない方がよいと思える。

それよりは、各事件の記述に則してC分詞使用の多寡を見ると、ここには何かがありそうだと思える。しかし余り短い箇所では何を言うにも危険が伴うので、100 行以上の文を費して述べてある事件の記述の中から、とくにC分詞、その中でもとくに CprM と CpoM、すなわち動機を表す分詞構文が多い箇所とそれが少ない箇所を拾い出してみる。その際、多いとは 20 行に 1 回以上頻繁に現れる場合、少ないとは 40 行に 1 回以下しか現れない場合と決めておく。

まず多い方は、I 56-66：ポテイダイアをめぐる紛争。II 1-6：プラタイアをめぐって。IV 66-74：メガラの攻防戦。78-88：ブラシダスのトラキアでの活躍。120-132：カルキディケをめぐって。V 1-12：クレオン対ブラシダス。13-

24: アテナイ・スパルタの平和条約、いわゆるニキアスの平和。27-35: アルゴスをめぐって。40-52: 平和条約とアルゴス。57-63: アルゴスをめぐって。VIII 64-71: アテナイに四百人会成立。99-107: キュノッセーマの海戦。以上12箇所（内5箇所まで第5巻に集中している）。

次に動機を表する分詞構文の現れることが少ない箇所を挙げる。I 1-23: 序説。II 47-58: アテナイの悪疫流行。71-78: プラタイアの攻防戦。95-103: シタルケス、マケドニアを攻める。VI 1-6: シシリー島地誌。VII 25-35: シシリーにアテナイ増援軍その他。VIII 89-93: 四百人会失墜。以上7箇所（うち3箇所は第2巻）。

こうして挙げてみて、動機を表す分詞構文の多い箇所とそれが少ない箇所に、それぞれに共通の一定の性質でも見つかれば話は簡単だが、そうは行くまい。ただし、多い箇所の方で12箇所中10箇所までが戦闘あるいは事件の描写（そうでないのはV 13-24のニキアスの平和と、VIII 64-71の四百人会成立だけ）であり、少い方の7箇所のうち3箇所が事件の描写というよりは事情の説明であることは一応注目してよい。7箇所中3箇所では、少ない方について何か言うのはむずかしいが、動機を表す分詞構文が多い方については、作戦行動のような動きの激しい箇所が大体そうなのだぐらいのことは言えるであろう。もともと「動機」とは行為・行動の動機なのだから、行為・行動に富んだ箇所にそれが多いというのは理屈に合っている。少ない方にしても、まず筆頭にツキジデス冒頭の23節が挙っているので、先ほどもちょっとだけ触れたポリュビオスのC分詞の分布のことなど思い出すのは自然なことである。彼は、所々で歴史の叙述を中断して自説や感慨を述べるということをやっているのだが、そういう箇所では、動機を表す分詞構文はおろか分詞構文そのものがほとんど用いられていない（I 35, 57, 64-5など）。してみると、こういう箇所は作戦行動等の対極で、従って分詞構文は少ないものなのだと決めてかかってもよさそうだと思う。

しかしそうするとなおのこと、作戦行動の叙述でもないのに分詞構文が多い箇所、あるいは逆に、作戦行動を叙しているのに分詞構文が少い箇所、つまりいずれにしても例外的な箇所は、なぜ例外になっているのかは気にしないわけには行かない。

そこでまずV 13-24のニキアスの平和が成立したいきさつを観察してみる。ただしこのうち18-19と23-24は条約文の引用だから除いて、残りの13-17と20-22を対象とする。計137行になる。——アムピポリスへ向うスパルタの救援

隊は、経由地の住民は前進を妨げるし[10] 本隊の将軍ブラシダスは死んでしまったし[10] で「途中から本国へ引返すことにした。アテナイ軍は敗れて退いてしまったのだし[10]、ブラシダスが考えていた計画を遂行する能力は自分たちにはないし[10] で、もはや目的地に行くことには何の益もないと考えたからである (νομίσαντες, CpoM)。しかし何よりもまず、彼らが国を出た時、本国のスパルタ人がますます和平論に傾いていたのを彼らは知っていたから (εἰδότες, CpoM) である。」(以上13節) 両国はその後一層和平を考え始める。「アテナイ側はデリオンで、そして日ならずして今度はアムピポリスで痛撃を受けたから (πληγέντες, CpoM)[11] であり、もはや武力を恃んでの揺がぬ希望を持ち得なかったから (οὐκ ἔχοντες τὴν ἐλπίδα, CpoM) である。(その希望があったればこそ以前には和平交渉を聞き入れなかった。今の幸運がつつけば勝利を得るだろうと考えて (δοκοῦντες, CpoM) であった。) その上同盟国どもが、これらの敗戦に意を強うして (ἐπαιρόμενοι, Cpr)[12] ますます反旗を翻し始めはしないかと恐れた[13]…。」スパルタはスパルタ側でいろいろな誤算が生じていた。「スパクテリア島の一件では一敗地にまみれ (περιπεσόντες, Cpo)、…は…し、…は…し、…するといった次第で[14]。」(以上14節)「かくて双方共このように考えて (λογιζομένοις, Cpr)…」、しかしとくにスパルタの方が強く和議を望んだ。「初めはアテナイは戦況有利だったために (εὐφερόμενοι, Cpo) 対等の条件で和議を結ぼうとしなかったが、デリオン敗戦以後は彼らも呼びかけに応ずるだろうと (スパルタ側は) 判断して (γνόντες, CprM)」とりあえず休戦条約を結び、その間に「より長期の条約に向けて会談して (συνιόντας, Cpr) 討議すべきこととした。」(以上15節)。とくに双方の主戦論者だったクレオンとブラシダスが戦死したので、事を妨げる者はいなくなった。クレオンが反対したのは「平和になれば、自分が悪業に励んでいたことが知れ渡ろうし、他人を誹謗しても (διαβάλλων, Cpo) 信じて貰えなくなるだろうと思って (νομίζων, CpoM) である。」しかし今やスパルタのプレイトアナクスとアテナイのニキアスが「ことさらに熱心になって (σπεύδοντες, Cpr)」事を運んだ。ニキアスが熱心だったのは、今までのところ幸運に恵まれているのでこれを何とか持続させ、国を危うきに陥らせなかった者として将来に名を遺したいと思ったから (βουλόμενος, CpoM) であり、そのためには危険を避け、偶然に身を委ねぬこと、そして平和こそそういう安泰も与えてくれるものと考えたから (νομίζων, CpoM) であり、プレイトアナクスの方は、自分の復権のことでスパルタ人か

ら誹謗され（διαβαλλόμενος, CpoM）、何かにつけて、非合法に復位などするからこんなことになるのだと取沙汰されていたから（προβαλλόμενος, CpoM）であって…」（以上16節。省いた部分に Cpr, Cpo 各1あり）。「このような誹謗に悩まされたために（ἀχθόμενος, CprM）、また平和になれば…だろうと考えて（νομίζων, CprM）条約締結を熱望したのだった。」かくて双方交渉のテーブルにつき、互に歩み寄って締結へと漕ぎつける（以上17節ここに Cpr, Cpo 各1）。

戦闘場面の描写ではない箇所としては、ここに含まれている分詞構文の数は異常に多いと言ってよい。しかしそれなら読んでいて異常を感じるか（上に紹介した筆者の文章なら異常に感じる。分詞構文をわざと目立たせるようにしたから）と言うと、そんなことはない。――ここは戦争の先行きに不安を感じた双方が、何とか停戦、できれば永続的な平和のきっかけをつかみたいと躍起になったり模索したりしているところで、やがてそのように事が運び始めて、アテナイ・スパルタがまず和平協定、ついで同盟条約を結ぶに至ったいきさつをつぶさに語っている。双方に当事者がいて、その当事者たちにはそれぞれの思わくがあって、その思わくに添うて、あるいはそれを巧みにかくしたり利用したりして、それぞれ目的を果そうとする。この箇所で分詞構文、とくに CpoM が多いのは、すべてその思わく、あるいは思わくのきっかけを説明するためにそれが用いられているからである。

次に20-22節だが、実は20節はツキジデスが自分の年代表記法（戦争第何年目の夏、とか冬、とか記す）の合理性を主張していて、ニキアスの平和とは関係がない。そして分詞は多いが分詞構文は1個しかない。22節にも CpoM 1個がある以外には分詞構文はない。ところが真中に挿まれた21節だけは、分詞構文に関する限り前後の節とは断然様子が違う。ここは停戦条約に対するスパルタの同盟国の不満を述べていて、17行。四つの文から成っていて7個の分詞構文がある。とくに注目すべきはその四つの文の最後のものである。四つの文の中では最も長く（と言っても、ツキジデスの文としては、長い方には違いないがとくに長い文ではない）、59語（OCT で8行）から成り、含まれている分詞6個、そのうち分詞構文は3である。原文を diagram 化して示すと次のようになる。

—*'Ελθὼν δὲ αὐτὸς κατὰ τάχος μετὰ πρέσβεων αὐτόθεν*

Cpr

—*ἀπολογησόμενός τε ἐς τὴν Λακεδαίμονα,*

CpoM

—*ἣν κατηγορῶσιν οἱ περὶ τὸν 'Ισογόραν*

—*ὅτι οὐκ ἐπείθετο,*

—*καὶ ἅμα βουλόμενος εἰδέναι* 5

CpoM

—*εἰ ἔτι μετακινητὴ εἴη ἡ ὁμολογία,*

—*ἐπειδὴ ηὗρε κατειλημμένους*

Supplpt

→*αὐτὸς μὲν πάλιν*—

→ *πεμπόντων τῶν Λακεδαιμοίων*

GenAbs

καὶ κελευόντων *μάλιστα μὲν καὶ τὸ χώριον παραδοῦναι,* 10

GenAbs *εἰ δὲ μή,*

ὁπόσοι Πελοποννησίων ἔνεισιν ἐξαγαγεῖν,

κατὰ τάχος ἐπορεύετο.

これは、条約に基いて、アテナイから奪取したアムピポリスをアテナイ人に返還せよという命令を受けた総督のクレアリダス（彼はスパルタ本国から派遣されてアムピポリスの統治を委任されていた）が、一旦その命令を拒否したものの、とにかく本国の意向を打診してみようとはるばるスパルタへ来たが、到底交渉の余地はないと知って急遽引返した、という一節である。主節は上の diagram の8行目の *αὐτὸς μὲν πάλιν* と最終行の *κατὰ τάχος ἐπορεύετο*「彼は急ぎ戻った」で、間に長大な挿入句が介在している（Diagram を原文通りに読むには、矢印等には構わず上から順々に読めばよい）。ところでその主節に上から二つ（1行目の分詞構文と7行目の副詞節）下から二つ（9行目と10行目の絶対属格に導かれるもの）の修飾句がかかっている、というのが大体の骨組である。まず上からの二つとは、*'Ελθών* に始まる分詞構文（「急いで使節

らを従えてそこへ来たが」）と7行目 ἐπειδή に始まる節（「（スパルタ人が条約に）拘束されてしまっていると知ったので」）だが、このように2個以上の修飾句が主節にかかる場合、他の作家ならたいていは分詞構文2個か副詞節2個かに揃えるものである。それをそうしないのはツキジデスの流儀である。その際分詞構文だからと言い副詞節だからと言って、意味の上に軽重の差はない。ところでこの分詞構文は「彼は来た」と言っている。そこで次に「なぜ来る気になったか」を説明する分詞構文を2個後につづけてこれを初め分詞構文に従属させている（diagram の2行目 ἀπολογησόμενος と5行目 βουλόενος。それぞれ「弁明しようとして」「知りたいと思って」）。ἀπολογησόμενος にはさらに従属節がつづく――「イソゴラス一派の者たちが訴えるようなことがあったら」（ἢν κατηγορῶσιν･･･）「（国家の命令に）服従しなかったと。」6行目 εἰ 以下は不定法 εἰδέναι の目的語である（「両国間の同意は未だ変更を加えられるかどうか」）。――以上がクレアリデスがわざわざやって来た理由であるが、来てみると7行目のようなこと（上述）になっていたので「彼は急ぎ帰った。」ところでこれは彼自身の側の理由である。「…だと知ったので」帰ったのである。ところが理由は他にもある。今度はその理由は国側から彼に押しつけた。「任じたので」（9行目）「命じたので」（10行目）。10-12行目はその命令の内容（「きっぱりとアムピポリスを返還せよ。それが無理なら市内のスパルタ人を引揚げよ」）。つまり彼は「これはとても見込みがない」と知ったから帰るだけではない、国がそう命ずるから帰ったという事情もあった。その事情を、この主節内に挿入された2個の絶対属格が示している。絶対属格だし挿入句だし、従属節や分詞構文より重みは軽かろう。しかしこうして二重の理由・事情が説明された。クレアリデスがやった行為というのは要するに「様子を見に来たが帰った」というだけのことだが、その「来て帰った」という行為にいろいろな事情が付着している。ツキジデスはそれを順序よく、相互関係も考えながら一つの文章にまとめたのである。行為が一つだから文も一つになって、それに伴うあらゆる事情を分詞構文、従属節、絶対属格を駆使して「来て帰った」一点に結びつけたのである。

今度は戦闘場面にしては分詞構文の少ない箇所を見る。II 71-78 節のプラタイア籠城の条を取上げる。ここはアルキダモスの率いるスパルタ軍が、忽ち陥落させるつもりで攻めたところが、プラタイア人が全力を挙げ知慧をしぼってあの手この手で抵抗し、ついに長期に及ぶ籠城が始まった、という条である。この間に両陣営から演説が何度か応酬されているのを割愛すると、全部で97

行、分詞構文は53個もある（これだけの行数にこれだけの分詞構文というのはかなり多く、分詞構文全般についてはツキジデスとしては多すぎる点で異常だと言える。）のに、動機を表す分詞は CprM, CpoM 各1、計2しかないというのは少ない。ここで面白いのは、実はこの巻の初め (2-5) に、同じプラタイアをテバイ軍が攻め、やはりプラタイア人の知恵と勇気のために散々な目に遇う話があって、そこは全文129行で分詞構文は34個（これはツキジデスとしては少なめの方。3.8行に1個の割になっている。ツキジデス全巻では3.2行に1個の割）しかないのに動機を表す分詞構文は7個もある。つまり18.4行に1回の割（ツキジデスの平均は22.7行に1回）。71-78では97行中に2回しか現れなかった動機を表す分詞構文が、同じプラタイア攻防戦でもここでは129行に7回も現れている。これはなぜか。まさか攻め手が違うからではあるまい。しかし、それほど調べるまでもなく、がっかりするほどすぐに気がつくことが一つある。それは、71-78には演説があるが2-5にはそれがないということである。この演説の有無と動機を表す分詞構文の多寡に関係がありそうかなさそうかを確かめるために、まず71-78の演説の内容を知ることにする。簡単に演説と言ったが、本当に演説であるのはプラタイア人のスパルタ難詰の演説 (71) とそれに答えるアルキダモスの自己正当化の演説 (72.1) だけで、あとはスパルタ側の要求を直接話法、プラタイア側の返答を間接話法で2度繰返す (72.3-74.1)。話法に違いはあっても（なぜ違うのか筆者には分らない。有名な第5巻の「メロス談判」という直接話法による一問一答形式が読者に伝えているのも、この箇所と全く同じ状況下の同じような出来事である）[15]、これは双方の言い分には相異なくて、要するにここでは攻める側と反抗する側の言い分が演説になっているのである。そこで今度は2-6のテバイのプラタイア攻めを見ると、先に言ったようにここには演説はない。だから今のような双方の言い分は述べてない。しかしなぜ攻めたか、なぜ反抗したかということはツキジデスの叙述の文で書いてある (2.2-3.2)。プラタイア国内に一派があって、これが政敵たちを亡ぼしたいと考えて (*βουλόμενοι*, CpoM) テバイと通じてテバイ軍の手引きをする。従ってテバイ軍は戦わずしてプラタイア市内に入ったわけで、プラタイア市民に大いに驚き (*καταδείσαντες*, CpoM)、テバイ軍の兵力を実際より多いと思ったので (*νομίσαντες*, CpoM) 一旦はテバイ軍に対して平静を保ったが、やがてテバイ軍の兵力がそう大したものでないを知り、攻めれば容易にやっつけることができると考えた（この「知り」「考えた」のは共に定動詞で、paratactic に並んでいる）。そこで反撃することに決めて…というこ

とになる。ここまで26行、分詞構文9、そのうち動機を表すもの4であり、以下プラタイア人の反撃とテバイ軍の狼狽の叙述が3.3-5とつづくが、それが103行で分詞構文25、うち動機を表すもの3である。すると、表3に準じてCprM+CpoMの頻度を出してみると、2.2-3.2は6.5行に1回となり、3.3-5は34.3行に1回となって、その違いが歴然とする。ただし、5.4以下は両者が互に自分に有利なように事を収拾しようと交渉する条であって戦闘描写ではない、というのでこれも2.2-3.2の演説部に準ずるとすれば、戦闘場面は3.3-5.3となり、全82行、分詞構文20、うち動機を表すもの1となり、演説・交渉の部は47行、分詞構文14、うち動機を表すもの6となる。

以上二つのプラタイア攻防戦の描写に含まれた動機を表す分詞構文について紹介したが、ここから出て来ることはかなり重要な意味を含んでいる。すなわち、戦闘場面には分詞構文が多い（これは事実）けれども、動機を表す分詞構文は、その場面の叙述の中で言い分や思わくが語られるのでない限り少い、そして、演説という形がその言い分・思わくを伝えるのに利用されることがあるということである。

7

以上で事実の紹介とそれについての筆者の註釈を終る。引出し得た事実、およびほぼ事実と認定できることは次の通りである。

(1) 分詞構文全体について言えば、後代の作家ほど多用している。しかし「動機を表す分詞構文」となると、ツキジデスにその用例が最も多い（§§2,3 & 4）。

(2) 一般に分詞構文は定動詞より前に置かれる傾向が強いが、動機を表す分詞に限ってこの傾向はとくに強くない。すなわち定動詞より後に置かれることが一般の分詞構文に比べるとかなり多い。とくにツキジデスはこの点が著しい。もし分詞構文を定動詞より後に置く場合には、それを前に置く場合よりも、定動詞に対する分詞の独立性がやや強くて、分詞構文を使うことそれ自体がいくらかでも強く意識されているとすれば、動機を表す分詞構文は他の分詞構文より意識的に使われていることになる（§3）。

(3) 動機を表す分詞構文に使われる分詞としては、「…と思って」「…と知って」「…と欲して」「…を恐れて」「…と期待して」「…を見て」「…を聞いて」に依存する度合が、ヘロドトスとツキジデスではかなり高く、後代になるほどこ

の依存度は低くなる。つまり分詞の語彙がふえる（§4）。

(4) 分詞構文全般ならば、戦闘場面のような、行動を多く含む叙述にそれが多いが、動機を表す分詞は当然ながら言い分、思わくが述べられている部分に集中する。従って演説と動機を表す分詞構文とは互に交換可能なことがある（§5）。

以上の中で最も重要なのは、動機を表す分詞構文を最も頻繁に使っているのはツキジデスだということである。そしてそのことがそのまま、ツキジデスはその歴史叙述の中で、多くの場合推測するしかない動機を、他の歴史家以上に頻繁に述べている、ということに直結するのかどうかは問題で、しかも扱うのがむずかしい。なぜなら動機は単に分詞構文によってのみ表されるものではないからで、現に上で見たように演説によってもそれはできる。しかしそれだけでもないだろうし、ツキジデスにも他の作家にも、その実例はいくらでもある。διότι などという接続詞もこのため利用することができるだろう。しかし定動詞にしても διότι にしても、一定の形をした語としてテキストの中に明確に存在するからまだいい。もっと困る例として、例えばポリュビオスのI 68 などというのはどうだろう。ここでは、カルタゴ人が自分たちの傭った傭兵どもの横暴ぶりに手を焼いている様が描かれているのだが、この節全体にわたって、カルタゴ人から見れば傭兵横暴の原因だが、傭兵の側から見れば動機に当るようなことが書いてある。しかもあくまでも節全体としてそうなのであって、とくにどの語、どの句、どの文がそれに当る、と明確に指示できるわけではない（参考までに示すと、この節の OCT 換算行数 48、動機を表す分詞構文は1個しかない）。こういう事情をさらにはっきりと示しているのが例えばヘロドトスの VII 163 ではないかと思える。ペルシアの来寇を迎えて、ギリシアの連合国がシシリーに援軍派遣を交渉したが失敗する条である。この節ははっきり二分されていて、前半は連合国の申入れを拒否する決意をシシリー側がする所で、CprM, CpoM 各1を含む6行の文、つまりヘロドトスはここではっきりと彼らが拒否する動機を示しているのだが、後半は違う。ギリシアの要求を拒否する代りに彼らが考えた方策というのがここで紹介されているのだが、それは、緒戦においてギリシアが勝ってもペルシアが勝っても、シシリーとしてはどちらにも対応できるというもので、みごとな打算と言えるが、打算、すなわち思わくそのものは書いてなくて、方策の具体的な説明しかない。つまり、その方策を採った動機には一言も触れることなく、と言うより、この具体的説明を見れ

ばもはや動機などいちいち書くまでもなく、読者にはちゃんと分る。動機を語っていることを指示するものが全くない（ついでながら動機を表す分詞構文も0である）ながら動機が語られている。

この種の文章はポリュビオスやヘロドトスに限らずどの作家にもあるに違いない。（今回筆者が見た限りでは、ツキジデスにはこういう文章はなかったが、皆無というのは信じ難いので、時間をかけて確かめる所存である）。だから、分詞構文という形ではツキジデスが最もしばしば動機を書いたが、分詞構文以外の動機の表し方を考慮に入れてもはやりそうか、そうでないのかは、今は言うことができない。動機の示し方に関してはツキジデスが最も正直だったのかも知れない。というのは、分詞構文でそれを示す時にはその8割以上を上記§5に挙げた分詞に依存し（この点はヘロドトスもそうだが）、分詞以外の方法によって動機を示すことは少なかったと思われるからである。

註

(1) 1982年4月23日、文芸・言語学系主催により大学会館で行われたもの。'Thucydides in 1982' と題された。これは1983年中にアメリカの雑誌 *History and Theory* に掲載を予定されている論文 'Thucydides as Literature and as History' に多少手を入れたものである。

(2) 註釈というのは、1945年に A. W. Gomme が手がけ、1956年に第3巻まで出しながら死去したために、A. Andrewes とドーヴァ先生が後を承けて、1970年に第4巻、そして1981年に第5巻を出して完成させた *A Historical Commentary on Thucydides* (Oxford) のこと。「百回以上云々」（そして「六千時間以上の時をこのためと費し……」とも言われている）は先生の近著にも書いてある。Cf. K. J. Dover, *The Greeks* (London 1980) 34f.（久保正彰訳『私たちのギリシャ人』なら89-90頁）

(3) 筑波大学の講演の上では先生ははっきりそう言われた。

(3a) 叙事詩人が「それに答えて（τὸν δ'ἀπαμειβόμενος）誰某が言うことに」と言うのと実質的には同じだろうという意味で。

(4) 一般に「色名辞典」とか「カラー・ガイド」とかいう名で売られているものが一応拠り所にはなろうが、それで万事解決ということになるとは思えない。

(5) ポリュビオスは彼の『歴史』の所々で叙述を一旦中断して一般論や教訓や感想を述べる（第1巻でなら1-3, 13-15, 35, 57-58, 6, 64-65）。そういう所では分詞の使用数が普通の叙述の部分より3-4割方減る。ところが分詞構文はもっと減る。数分の一に減ってしまう。これがこの件に関してポリュビオスが例外となる一つの原因であろう。なお今挙げた箇所の行数の合計は297行あるから、第1巻全体の1割強に当る。

(6) 一般にこの問題に関心を寄せるのは文法家よりは修辞家、それよりはさらにいわゆる「ハウ・ツウもの」の著者らしい。そういう人が書いた本を見ると、従属節よりはまず主節を書いて、何が何であるのか、何がどうしたのかを言ってしまう、そしてそれから必要なら従属節を書く、こうすると文章が分り易くなります、などと書

いてある。筆者の知る限りでこの問題を最も詳しく扱っている最近の本は Walter Nash, *Designs in Prose* (London 1980) 111ff. だが、これとても説明と実例が多いだけで何も論じてはいない。

(7) ドーヴァ先生の講演に引用された A. H. M. Jones, *Athenian Democracy* (Oxford 1957) 67f. の評言。

(8) この有名な呼称は多分キケロの発明ではなく、むしろ彼の時代には有名になっていたのだろうと思われる。筆者編による『文学の根拠』(東京 1978) 所収の拙稿「文学と文学でない文」30頁、註1を参照。

(9) ツキジデスの巻別についての最近の所論としては Gomme-Andrewes-Dover, op. cit., Vol. 5 (London 1981) に 'Appendix 2' として書かれたドーヴァ先生の 'Strata of Composition' という長大な論文の p. 389f. を参照。

(10) この番号を付けた4語はいずれも Genitive Adsolute になっている。このように副詞節めいたものをたくさんつづける時には、弁論術ではよくそのまま副詞節を重ねて、最後に主節でぴたりとおさめるという方法を採ったようだが、今回扱った5人に関する限り、副詞節よりは分詞構文または Genitive Absolute を用いる傾向がある。その際ツキジデスはどちらかと言うと Gen. Ads. を、クセノポンとプルタルコスは時に分詞構文、時に Gen. Abs. を、ポリュビオスは分詞構文を選ぶ癖があるように見受けられる。なおこの4語すべて「‥‥と考えた」根拠ではあっても「動機」ととるには些か無理があると考えて採らなかった。「原因」(当人たちの外にある)と「動機」(当人たちの内部から行動へ衝り立てる)とを区別する立場をとったのである。

(11) これは上の詩で扱った Gen. Abs. についてと同じ迷いを感じた後に、「動機を表す分詞」と判定した。その理由は、この分詞は明かに後続の *οὐκ ἔχοντες τὴν ἐλπίδα* 「希望を持ち得なかったゆえに」と一組をなしており、そしてそれは動機を示しているから、というのと、もう一つ、*πληγέντες* は受動相であり、つまり「敗戦が痛撃を与えたから」でなく「(彼らが) 敗戦に痛撃されたから」と、彼ら自身のこととして語られているから、というのとの2点である。

(12) 「意を強うして」だから確かに動機を表している。しかしここではそれが「‥‥と恐れた」という文の一部、すなわち一種の間接話法の中にあるので、採らなかった。

(13) この「‥‥と恐れた」は定動詞によるもの。本文§6を参照。

(14) ここの「‥‥し、‥‥し、‥‥する」というのは、この数だけ Gen. Abs. が使われていることを表している。上記註(10)参照。

(15) 大きな違いは、「メロス談判」ではアテナイ代表とメロス代表が同席して、その場で丁丁発止とやり合っているのに対して、ここではプラタイア代表はスパルタ軍の陣営に出向いていて、そこで会談が行われている。スパルタ側から要求や提案が出されるたびに、プラタイア代表は市内に戻って市民と協議して、その結果をまた陣営に赴いて伝える、という方法をとっている、ということである。これがすべて間接話法になっているわけだが、これはプラタイアでは実際このように会談が行われ、メロス島では実際にああいう会談が行われたから、ツキジデスがその通りに書いたのか、それとも実際はどうだったかよく分らないけれども、ツキジデスがこうだったに違いないと考えてそれぞれにこういう形を与えたのかは今の所分らない。しかしこのことは、ドーヴァ先生がやはり講演の中で触れておられた「ツキジデスはどういう交渉、どういう激励については演説の形で書かねばならぬと判断したのか」(言い換えれば、どういう交渉、どういう激励は叙述するに止めておいてよいと判断したのか)という問題につながる。

付記：— 「英雄伝」全体を通じて、プルタルコスもかなり Cpo を使っているという印象を筆者は持っている。しかし彼の場合、その Cpo の大半は「もっとも‥‥ではあったけれども」と言い添えるために使われていて、これは場合によっては知識過剰、場合によっては歯切れの悪さの現れだと筆者は思っている。